

SGH の事業成果検証に関する調査報告書(速報)

—指定校管理者対象調査—

2018 年度

筑波大学附属学校教育局



University of Tsukuba



SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

目次

はじめに	1
1. 回答校の属性	1
1.1 SGH 校に指定された年度	1
1.2 SSH 校への指定の有無	1
2. SGH プログラムの概要	2
3. SGH プログラムによる生徒の変化への期待（重要度）と成果	9
3.1 文化の違いから生じる困難な事象に対する解決行動力	9
3.2 国際的に将来活躍できるためのマインドセット	11
3.3 社会で生じるさまざまな問題に対する解決方法探索能力	13
3.4 重要度と成果との関係	16
4. SGH プログラム実施による SGH 指定校への影響	18
4.1 SGH プログラム実施による生徒の進路の変化	18
4.2 SGH 指定校になったことによる入学者の資質の変化	20
5. SGH プログラムの有用性評価	22
6. 現行 SGH プログラムの改善点	25
6.1 SGH 管理機関に対する満足度	25
6.2 改善の必要な点	25
7. SGH プログラムの自走可能性	31
8. 小括	32
SGH の事業検証に関する調査	34

調査設計・執筆者

調査設計：筑波大学 SGH 事業検証研究班

代表研究者：永井 裕久（筑波大学ビジネスサイエンス系教授・附属学校教育局特命補佐）（小括担当）

○椿 広計（統計センター理事長・筑波大学名誉教授）

BENTON Caroline F.（筑波大学副学長・理事：国際担当・ビジネスサイエンス系教授）

濱本 悟志（筑波大学教授・附属学校教育局次長）（研究倫理担当）

木野 泰伸（筑波大学ビジネスサイエンス系准教授）

川崎 将男（株式会社アルゴ専務取締役）

朱 藝（筑波大学ビジネスサイエンス系助教）

○：報告書主担当執筆者

はじめに

平成 30 年度文部科学省「スーパーグローバルハイスクール事業の成果検証」事業では、平成 26 年度から平成 28 年度まで指定された SGH 校 123 校の管理者（校長・副校長・教頭等）から、SGH の成果検証に関する回答 119 件（有効回答率 96.7%）を得た。本速報は、この中で自由記述を除いた調査項目について、その概要を紹介する。

1. 回答校の属性

1.1 SGH 校に指定された年度

回答校を SGH 校に指定された年度ごとに示すと表 1 のようになり、平成 26、27 年度指定校（いずれも、当該年度の指定校 56 校中の 96.4%）が大半を占めている。

表 1.1 回答校の SGH 指定年度

指定年度	SGH 指定年度		
	n	有効 %	累積 %
H26 年度	54	45.4%	45.4%
H27 年度	54	45.4%	90.8%
H28 年度	11	9.2%	100.0%
計	119	100.0%	

1.2 SSH 校への指定の有無

SSH 指定校であるか否かについては、表 1.2 に示すように、全体の 23.5% が指定校である。

表 1.2 SSH 指定校

指定年度	構成	Q3.a. SSH 指定の有無			計
		はい	以前は指定校 だったが、 現在は指定 終了している	いいえ (これまで SSH 指定校だった ことはない)	
H26 年度	n	13	3	38	54
	構成比	24.1%	5.6%	70.4%	100.0%
H27 年度	n	12	2	40	54
	構成比	22.2%	3.7%	74.1%	100.0%
H28 年度	n	3	1	7	11
	構成比	27.3%	9.1%	63.6%	100.0%
計	n	28	6	85	119
	構成比	23.5%	5.0%	71.4%	100.0%

2. SGH プログラムの概要

SGH プログラムで、導入されている教育方法とその活動頻度について、7点尺度により回答を求めた。

Q1. 貴校の SGH プログラムで、導入されている教育方法とその活動頻度をお答えください。

1：導入していない

2：在学中 1 回程度

3：1 年間に 1 回程度

4：1 学期に 1 回程度

5：月に 1 回程度

6：週に 1 回程度

7：週に 2 回以上

a. 英語による英語以外の授業	1…2…3…4…5…6…7
b. 外国人教員などによる授業	1…2…3…4…5…6…7
c. ロジカルシンキングの方法 (筋が通った考え方や説明の方法) に関する授業	1…2…3…4…5…6…7
d. 現実問題の解決のための研究方法 (データの取り方や分析の方法) に関する授業	1…2…3…4…5…6…7
e. プレゼンテーションの方法 (資料の作り方、発表の仕方、質問への答え方) に関する授業	1…2…3…4…5…6…7
f. 課題研究レポートのまとめ方 (形式や構成) に関する授業	1…2…3…4…5…6…7
g. 海外研修	1…2…3…4…5…6…7
h. 海外生徒との交流経験 (海外研修を除く)	1…2…3…4…5…6…7
i. フィールドワーク	1…2…3…4…5…6…7
j. 日本語での課題研究レポート作成	1…2…3…4…5…6…7
k. 英語での課題研究レポート作成	1…2…3…4…5…6…7
l. 生徒自らによる探究課題設定	1…2…3…4…5…6…7
m. 生徒自らによる調査データ収集・分析	1…2…3…4…5…6…7
n. 日本語でのグループワーク	1…2…3…4…5…6…7
o. 英語でのグループワーク	1…2…3…4…5…6…7
p. 日本語でのディスカッションないしはディベート	1…2…3…4…5…6…7
q. 英語でのディスカッションないしはディベート	1…2…3…4…5…6…7
r. 日本語でのプレゼンテーション	1…2…3…4…5…6…7
s. 英語でのプレゼンテーション	1…2…3…4…5…6…7

単純に回答されたスコアを平均値の高い順に並べなおした結果を表 2.1 に示す。

表 2.1a SGH プログラムで平均月に 1 回以上の頻度で行われた教育方法

教育方法	指定年度	Q1. 教育方法と活動頻度		
		n	平均	標準偏差
n. 日本語でのグループワーク	H26 年度	54	5.85	1.14
	H27 年度	54	5.93	1.08
	H28 年度	11	5.64	1.21
	計	119	5.87	1.11
b. 外国人教員などによる授業	H26 年度	54	5.59	1.81
	H27 年度	54	5.54	1.76
	H28 年度	11	5.09	1.76
	計	119	5.52	1.77
e. プレゼンテーションの方法 (資料の作り方、発表の仕方、 質問への答え方) に関する授業	H26 年度	54	5.17	1.26
	H27 年度	54	5.31	1.30
	H28 年度	11	5.64	0.92
	計	119	5.28	1.25
c. ロジカルシンキングの方法 (筋が通った考え方や説明の方法) に関する授業	H26 年度	54	5.22	1.61
	H27 年度	54	5.09	1.62
	H28 年度	11	5.45	1.29
	計	119	5.18	1.58
d. 現実問題の解決のための研究方法 (データの取り方や分析の方法) に関する授業	H26 年度	54	4.94	1.42
	H27 年度	54	5.02	1.47
	H28 年度	11	5.36	1.21
	計	119	5.02	1.42
p. 日本語でのディスカッション ないしはディベート	H26 年度	54	5.09	1.47
	H27 年度	54	5.11	1.63
	H28 年度	11	4.09	1.81
	計	119	5.01	1.59

平均して最も頻繁に行われたのは、「日本語でのグループワーク」であり、平均週に 1 回に近い。それに次いで、「外国人教員などによる授業」、「プレゼンテーションの方法に関する授業」、「ロジカルシンキングの方法に関する授業」、「現実問題の解決のための研究方法に関する授業」である。アクティブラーニングとしては、「日本語でのディスカッションないしはディベート」が平均月に 1 回程度行われている。

2. SGH プログラムの概要

表 2.1b SGH プログラムで平均 1 学期に 1 回以上、月 1 回未満の頻度で行われた教育方法

教育方法	指定年度	Q1. 教育方法と活動頻度		
		n	平均	標準偏差
f. 課題研究レポートのまとめ方 (形式や構成)に関する授業	H26 年度	54	4.78	1.42
	H27 年度	54	4.96	1.39
	H28 年度	11	5.45	1.04
	計	119	4.92	1.38
o. 英語でのグループワーク	H26 年度	52	4.81	1.94
	H27 年度	54	4.85	1.98
	H28 年度	10	3.60	1.71
	計	116	4.72	1.96
m. 生徒自らによる調査データ収集・分析	H26 年度	54	4.33	1.67
	H27 年度	54	4.44	1.49
	H28 年度	11	4.36	1.69
	計	119	4.39	1.58
r. 日本語でのプレゼンテーション	H26 年度	53	4.25	1.07
	H27 年度	54	4.52	1.11
	H28 年度	11	3.91	0.94
	計	118	4.34	1.09
q. 英語でのディスカッション ないしはディベート	H26 年度	54	4.44	1.76
	H27 年度	54	4.02	1.93
	H28 年度	11	3.27	1.56
	計	119	4.14	1.84

月に 1 回以下だが、1 学期に 1 回以上行われている方法としては、「課題研究レポートのまとめ方に関する授業」、「英語でのグループワーク」、「生徒自らによる調査データ収集・分析」、「日本語でのプレゼンテーション」、「英語でのディスカッションないしはディベート」がある。そのうち、ほぼ月に 1 回近く行われているのは「課題研究レポートのまとめ方に関する授業」で、アクティブラーニング系の活動は「英語でのグループワーク」、「生徒自らによる調査データ収集・分析」、「日本語でのプレゼンテーション」、「英語でのディスカッションないしはディベート」である。

表 2.1c SGH プログラムで平均 1 学期に 1 回以上の頻度で行われなかった教育方法

教育方法	指定年度	Q1. 教育方法と活動頻度		
		n	平均	標準偏差
j. 日本語での課題研究レポート作成	H26 年度	54	3.63	1.32
	H27 年度	54	3.89	1.44
	H28 年度	11	4.27	1.27
	計	119	3.81	1.37
s. 英語でのプレゼンテーション	H26 年度	53	3.70	1.32
	H27 年度	54	3.83	1.58
	H28 年度	11	3.09	0.94
	計	118	3.70	1.42
l. 生徒自らによる探究課題設定	H26 年度	54	3.52	1.30
	H27 年度	53	3.75	1.44
	H28 年度	11	4.27	1.68
	計	118	3.69	1.41
i. フィールドワーク	H26 年度	54	3.56	0.92
	H27 年度	54	3.67	1.17
	H28 年度	11	3.73	0.65
	計	119	3.62	1.02
h. 海外生徒との交流経験（海外研修を除く）	H26 年度	54	3.44	0.90
	H27 年度	54	3.72	1.07
	H28 年度	11	3.18	1.08
	計	119	3.55	1.01
a. 英語による英語以外の授業	H26 年度	54	3.65	2.09
	H27 年度	54	3.09	2.24
	H28 年度	11	2.09	1.81
	計	119	3.25	2.17
g. 海外研修	H26 年度	54	2.80	0.90
	H27 年度	54	3.06	0.68
	H28 年度	11	2.82	0.87
	計	119	2.92	0.81
k. 英語での課題研究レポート作成	H26 年度	53	2.72	0.97
	H27 年度	54	3.04	1.66
	H28 年度	11	2.91	1.58
	計	118	2.88	1.38

「英語での課題研究レポート作成」、「海外研修」は平均すれば 1 年に 1 回未満の活動となっている。

しかし、「海外研修実施による生徒のグローバル意識・能力の向上」については、表 2.2 に示すように、ほとんど全ての高校で意識・能力が「高まったと思う」あるいは「とても高まったと思う」と回答しており、顕著である。なお、この傾向は平成 27 年度指定校の方が平成 26 年度指定校よりも統計的に有意に高い。

表 2.2 海外研修実施による生徒のグローバル意識・能力の向上

指定年度	構成	Q2.a. 海外研修経験による生徒のグローバル意識・能力の向上						計	平均	標準偏差
		1:全く高まっていないと思う	2:高まっていないと思う	3:どちらかと言えば高まっていないと思う	4:どちらかと言えば高まったと思う	5:高まったと思う	6:とても高まったと思う			
H26年度	n 構成比	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 1.9%	29 53.7%	24 44.4%	54 100.0%	5.43	0.54
H27年度	n 構成比	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	19 35.8%	34 64.2%	53 100.0%	5.64	0.48
H28年度	n 構成比	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	5 45.5%	6 54.5%	11 100.0%	5.55	0.52
計	n 構成比	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.8%	53 44.9%	64 54.2%	118 100.0%	5.53	0.52

また、SGH プログラムで導入されている教育方法のうち、以下の教育方法は、平成 26 年度指定校と平成 27 年度指定校で取組みに若干の差があるように見える。そこで、標本の大きさが小さい平成 28 年度指定校を除き、両者に統計的に有意な差（有意水準 5%）があるか否かを検討する。統計的には平均が 0.05 を超えているものは、ほぼ有意な差と考えることができる。

- (1) 平成 26 年度指定校の方が、平成 27 年度指定校よりも実施頻度が大きかったと考えられる教育方法：
- b. 外国人教員などによる授業
 - c. ロジカルシンキングの方法
 - g. 英語でのディスカッションないしはディベート
 - a. 英語による英語以外の授業

(2) 平成 27 年度指定校の方が、平成 26 年度指定校よりも実施頻度が大きかったと考えられる教育方法：

- n. 日本語でのグループワーク
- e. プレゼンテーションの方法に関する授業
- d. 現実問題の解決のための研究方法に関する授業
- f. 課題研究レポートのまとめ方に関する授業
- m. 生徒自らによる調査データ収集・分析
- r. 日本語でのプレゼンテーション
- j. 日本語での課題研究レポート作成
- s. 英語でのプレゼンテーション
- l. 生徒自らによる探究課題設定
- i. フィールドワーク
- h. 海外生徒との交流経験
- g. 海外研修
- k. 英語での課題研究レポート作成

これを見ると、平成 26 年度指定校は英語によるコミュニケーション、授業理解などが重視されていたが、平成 27 年度指定校は課題研究やプレゼンテーションなどの方法論が重視される傾向が生じている。

また、先に述べたように、SGH 指定校で SSH 指定校は 4 分の 1 程度であるが、表 2.3a に示すように、平成 27 年度指定された学校の方が、平成 26 年度に指定された学校に比べて両プログラムの連携が統計的に有意に高くなっていることがわかった。

表 2.3a SSH と SGH との間でのプログラム連携

指定年度	構成	Q3.b. SSH と SGH との間でのプログラム連携					計	平均	標準偏差
		1：全く連携させていなかった	2：あまり連携させていなかった	3：ある程度、連携させていた	4：連携させていた	5：強く連携させていた			
H26 年度	n 構成比	1 6.3%	2 12.5%	8 50.0%	3 18.8%	2 12.5%	16 100.0%	3.19	1.05
H27 年度	n 構成比	0 0.0%	2 14.3%	7 50.0%	4 28.6%	1 7.1%	14 100.0%	3.29	0.83
H28 年度	n 構成比	0 0.0%	0 0.0%	1 25.0%	3 75.0%	0 0.0%	4 100.0%	3.75	0.50
計	n 構成比	1 2.9%	4 11.8%	16 47.1%	10 29.4%	3 8.8%	34 100.0%	3.29	0.91

また、SSH と SGH との相乗効果も表 2.3b に示すように一定以上の相乗効果があると回答した学校が約 85% を占めた。

2. SGH プログラムの概要

表 2.3b SSH と SGH との間でのプログラム連携による相乗効果

指定年度	構成	Q3.c. SSH と SGH 両方の指定校であることによる相乗効果					計	平均	標準偏差
		全く相乗効果はなかった	あまり相乗効果はなかった	どちらとも言えない	一定の相乗効果があった	高い相乗効果があった			
H26年度	n 構成比	1 6.3%	0 0.0%	2 12.5%	8 50.0%	5 31.3%	16 100.0%	4.00	1.03
H27年度	n 構成比	0 0.0%	0 0.0%	2 14.3%	8 57.1%	4 28.6%	14 100.0%	4.14	0.66
H28年度	n 構成比	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	3 75.0%	1 25.0%	4 100.0%	4.25	0.50
計	n 構成比	1 2.9%	0 0.0%	4 11.8%	19 55.9%	10 29.4%	34 100.0%	4.09	0.83

SGH と SSH との連携ならびにその相乗効果は、標本の大きさが小さいこともあり統計的有意ではないが、平成 26 年度指定校より平成 27 年度指定校の方が、徐々に強くなってきているように見える。このことと、採用されている教育方法が、英語ないし日本語によるアクティブラーニングが強くなってきたこととの関連性がある可能性があり、今後検証すべきポイントである。

3. SGH プログラムによる生徒の変化への期待（重要度）と成果

本調査では、SGH プログラムにより、生徒のどのような能力の成長が重要であり、SGH プログラムの実施を通じて、実際に平均的な生徒に対してどの程度、目標が達成されたかを、以下の3.1～3.3に示すような3つの側面について6点尺度で回答を求めた。

3.1 文化の違いから生じる困難な事象に対するコンピテンシー

該当する設問は次のようなものである：

文化の違いから生じる、困った（困惑した）出来事（例えば、出会った外国人との言葉の壁、ジェスチャー・生活習慣・価値観の違い）に直面した際、

- (1) その解決のため、以下に挙げる行動をとれることは重要と考えていますか？
- (2) 貴校のSGHプログラム受講により、以前に比べて、生徒は、その行動ができるようになったと思われますか？

6段階（1：「全くそうは思わない」～6：「大変そう思う」）で、あてはまる番号を一つ選んでください。

- 1 全くそうは思わない
- 2 そうは思わない
- 3 どちらかと言えばそうは思わない
- 4 どちらかと言えばそう思う
- 5 そう思う
- 6 大変そう思う

	(1) 重要度						(2) SGH による効果					
	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
a. 相手の置かれた立場や気持ちを察する。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
b. 必要ならば、最初に決めたことを変える。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
c. 自分と異なる立場の人の価値観を尊重する。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
d. 複数の視点から問題の原因を考える。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
e. 複数の選択肢を考える。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
f. 相手が意見を述べやすいように心がける。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
g. 相手との協力関係を築くように心がける。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
h. 反対意見にも耳を傾ける。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
i. 自分の得意な能力を活かす行動をとる。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
j. 自分の意見を効果的に述べて相手に説明する。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
k. 解決が進んでいるか、途中で確認する。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
l. 今回の出来事から、学んだことを振り返る。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
m. 解決に向けて強い熱意をもち続ける。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

3. SGH プログラムによる生徒の変化への期待（重要度）と成果

この回答をトータルの平均重要度の大きさの順番に並べなおしたのが表 3.1 である。

13 項目中、重要度の平均スコアが上位 4 位までのコンピテンシーは、他者の立場の尊重や、複数の視点、反対意見の尊重などであり、いずれも多様性受容ないしはメタ認知に関わるコンピテンシーと考えられる。それに解決や説得に向けた意思や方法に関する 3 つのコンピテンシーが続いている。

表 3.1 コンピテンシーの活用に対する重要度と効果

コンピテンシー	指定年度	Q4. コンピテンシー活用					
		(1) 重要度			(2) SGH による効果		
		n	平均	標準偏差	n	平均	標準偏差
c. 自分と異なる立場の人の価値観を尊重する。	H26 年度	54	5.70	0.60	54	5.24	0.75
	H27 年度	54	5.61	0.60	54	5.22	0.66
	H28 年度	11	5.45	0.69	11	4.82	0.75
	計	119	5.64	0.61	119	5.19	0.72
d. 複数の視点から問題の原因を考える。	H26 年度	54	5.59	0.69	54	5.13	0.85
	H27 年度	54	5.41	0.74	54	4.98	0.84
	H28 年度	11	5.36	0.67	11	4.82	0.98
	計	119	5.49	0.71	119	5.03	0.85
a. 相手の置かれた立場や気持ちを察する。	H26 年度	54	5.43	0.72	54	4.98	0.86
	H27 年度	54	5.50	0.64	54	4.89	0.77
	H28 年度	11	5.45	0.69	11	4.73	0.79
	計	119	5.46	0.67	119	4.92	0.81
h. 反対意見にも耳を傾ける。	H26 年度	54	5.50	0.64	54	5.06	0.86
	H27 年度	54	5.41	0.63	54	4.85	0.81
	H28 年度	11	5.45	0.69	11	4.64	1.03
	計	119	5.45	0.63	119	4.92	0.86
m. 解決に向けて強い熱意を持ち続ける。	H26 年度	54	5.46	0.69	54	4.85	0.81
	H27 年度	54	5.30	0.74	54	4.89	0.88
	H28 年度	11	5.45	0.69	11	4.73	0.79
	計	119	5.39	0.71	119	4.86	0.84
j. 自分の意見を効果的に述べて相手に説明する。	H26 年度	54	5.50	0.67	54	5.04	0.82
	H27 年度	54	5.26	0.81	54	4.76	0.82
	H28 年度	11	5.36	0.92	11	4.91	0.83
	計	119	5.38	0.76	119	4.90	0.83
g. 相手との協力関係を築くように心がける。	H26 年度	54	5.35	0.73	54	5.04	0.82
	H27 年度	54	5.35	0.68	54	5.04	0.82
	H28 年度	11	5.36	0.67	11	4.64	0.92
	計	119	5.35	0.70	119	5.00	0.83
l. 今回の出来事から、学んだことを振り返る。	H26 年度	54	5.35	0.85	54	4.81	0.87
	H27 年度	54	5.17	0.75	54	4.69	0.91
	H28 年度	11	5.18	0.87	11	4.45	0.93
	計	119	5.25	0.80	119	4.72	0.89
e. 複数の選択肢を考える。	H26 年度	54	5.30	0.77	54	4.72	0.88
	H27 年度	54	5.17	0.72	54	4.70	0.82
	H28 年度	11	5.36	0.81	11	4.73	0.79
	計	119	5.24	0.75	119	4.71	0.84

f. 相手が意見を述べやすいように心がける。	H26年度	54	5.13	0.85	54	4.74	0.89
	H27年度	54	5.00	0.73	54	4.69	0.86
	H28年度	11	5.09	0.83	11	4.27	1.01
	計	119	5.07	0.79	119	4.67	0.89
k. 解決が進んでいるか、途中で確認する。	H26年度	54	5.02	0.90	54	4.50	0.95
	H27年度	54	4.87	0.85	54	4.31	0.84
	H28年度	11	5.00	0.89	11	4.18	0.87
	計	119	4.95	0.87	119	4.39	0.89
i. 自分の得意な能力を活かす行動をとる。	H26年度	54	4.89	0.88	54	4.59	0.86
	H27年度	54	4.87	0.83	54	4.43	0.86
	H28年度	11	5.00	1.00	11	4.45	0.82
	計	119	4.89	0.86	119	4.50	0.85
b. 必要ならば、最初に決めたことを変える。	H26年度	54	4.85	0.79	54	4.48	1.00
	H27年度	54	4.78	0.77	54	4.33	0.80
	H28年度	11	4.73	1.42	11	4.18	1.25
	計	119	4.81	0.85	119	4.39	0.94

3.2 国際的に将来活躍できるためのグローバルマインドセット

該当する設問は次のようなものである：

(1) 貴校の生徒が将来、国際的に活躍するようになるために、以下に挙げるマインドセットを持つことは重要だと考えていますか？

(2) 貴校のSGHプログラム受講により、以前に比べて、生徒は、以下に挙げるマインドセットが向上したと思いますか？

6段階（1：「全くそうは思わない」～6：「大変そう思う」）で、あてはまる番号を一つ選んでください。

- 1 全くそうは思わない
- 2 そうは思わない
- 3 どちらかと言えばそうは思わない
- 4 どちらかと言えばそう思う
- 5 そう思う
- 6 大変そう思う

	(1) 重要度						(2) SGHによる効果					
	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
a. 様々な外国へ行ってみたい。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
b. 外国の様々な異文化に触れることは楽しいと思う。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
c. 自分に自信がある。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
d. 自分の短所よりも長所に目を向けている。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

3. SGH プログラムによる生徒の変化への期待（重要度）と成果

e. 自分は人のために役立つことができる人間だと思う。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
f. 集団での問題解決場面において、率先してリーダー的な役割を担うことができる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
g. 議論する際、自分だけが意見を述べることなく、参加者それぞれの意見を聞くことができる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
h. 自分のやりたいことを見つけ、それに情熱を傾けたい。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
i. 将来は、外国の大学や大学院への留学（6 ヶ月以上）も視野に入れて勉強したい。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
j. 海外ボランティアなどの国際的な活動に積極的に参加したい。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
k. 将来、外国で働くことも視野に入れて、職業を選択したい。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

この回答をトータルの平均重要度の大きさの順番に並べなおしたのが表 3.2 である。

グローバルマインドセットについても、最も重要と考えられているのは他者の意見を聞くことであり、次に重要と考えられているのが海外文化を楽しく思えるマインドである。いずれも価値観の多様性を受容できるマインドセットとも考えられる。

表 3.2 グローバルマインドセットに対する重要度と効果

グローバルマインドセット	指定年度	Q5. グローバルマインドセット					
		(1) 重要度			(2) SGH による効果		
		n	平均	標準偏差	n	平均	標準偏差
g. 議論する際、自分だけが意見を述べることなく、参加者それぞれの意見を聞くことができる。	H26 年度	54	5.48	0.69	54	5.06	0.83
	H27 年度	54	5.31	0.72	54	4.94	0.79
	H28 年度	11	5.36	0.67	11	4.73	0.90
	計	119	5.39	0.70	119	4.97	0.82
b. 外国の様々な異文化に触れることは楽しいと思う。	H26 年度	54	5.37	0.73	54	5.24	0.80
	H27 年度	54	5.31	0.67	54	5.19	0.70
	H28 年度	11	5.36	0.67	11	4.91	0.70
	計	119	5.34	0.69	119	5.18	0.75
f. 集団での問題解決場面において、率先してリーダー的な役割を担うことができる。	H26 年度	54	5.22	0.86	54	4.78	0.84
	H27 年度	54	5.11	0.86	54	4.69	0.77
	H28 年度	11	4.91	0.70	11	4.55	0.52
	計	119	5.14	0.85	119	4.71	0.78
h. 自分のやりたいことを見つけ、それに情熱を傾けたい。	H26 年度	54	5.09	0.85	54	4.70	0.90
	H27 年度	54	5.04	0.75	54	4.74	0.87
	H28 年度	11	5.36	0.67	11	4.55	0.93
	計	119	5.09	0.79	119	4.71	0.89
c. 自分に自信がある。	H26 年度	54	5.04	0.85	54	4.37	0.68
	H27 年度	54	5.13	0.78	54	4.39	0.83
	H28 年度	11	5.09	0.70	11	4.36	0.50
	計	119	5.08	0.80	119	4.38	0.74

e. 自分は人のために役立つことができる人間だと思う。	H26年度	54	5.06	0.76	54	4.50	0.80
	H27年度	54	5.04	0.73	54	4.48	0.69
	H28年度	11	5.18	0.87	11	4.27	0.79
	計	119	5.06	0.75	119	4.47	0.75
a. 様々な外国へ行ってみたい。	H26年度	54	5.00	0.87	54	4.98	0.84
	H27年度	54	5.07	0.72	54	5.02	0.71
	H28年度	11	4.73	0.90	11	4.73	0.65
	計	119	5.01	0.81	119	4.97	0.76
j. 海外ボランティアなどの国際的な活動に積極的に参加したい。	H26年度	54	4.89	0.84	54	4.63	0.98
	H27年度	54	4.78	0.84	54	4.54	0.84
	H28年度	11	4.64	0.81	11	4.45	0.69
	計	119	4.82	0.83	119	4.57	0.89
i. 将来は、外国の大学や大学院への留学（6ヵ月以上）も視野に入れて勉強したい。	H26年度	54	4.80	0.90	54	4.69	0.89
	H27年度	54	4.85	0.88	54	4.46	0.84
	H28年度	11	4.73	0.79	11	4.27	0.90
	計	119	4.82	0.87	119	4.55	0.87
k. 将来、外国で働くことも視野に入れて、職業を選択したい。	H26年度	54	4.80	0.90	54	4.59	0.94
	H27年度	54	4.87	0.85	54	4.46	0.86
	H28年度	11	4.45	1.13	11	4.45	0.93
	計	119	4.80	0.90	119	4.52	0.90
d. 自分の短所よりも長所に目を向けている。	H26年度	54	4.80	0.92	54	4.20	0.76
	H27年度	54	4.67	0.78	54	4.20	0.68
	H28年度	11	5.00	0.89	11	4.00	0.63
	計	119	4.76	0.85	119	4.18	0.71

3.3 社会で生じるさまざまな問題に対する探究行動

該当する設問は次のようなものである：

社会で起きるさまざまな問題に対する解決方法を見つけるために、

(1) 以下に挙げる能力を持つことは重要だと思いますか？

(2) 貴校のSGHプログラム受講により、以前に比べて、生徒は、以下に挙げる能力が高まったと思いますか？

6段階（1：「全くそうは思わない」～6：「大変そう思う」）で、あてはまる番号を一つ選んでください。

- 1 全くそうは思わない
- 2 そうは思わない
- 3 どちらかと言えばそうは思わない
- 4 どちらかと言えばそう思う
- 5 そう思う
- 6 大変そう思う

3. SGH プログラムによる生徒の変化への期待（重要度）と成果

	(1) 重要度						(2) SGH による効果					
	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
a. 基礎学力としての知識を持つ。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
b. 関心ある事柄について、その問題の本質を発見したり、原因を説明することができる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
c. 問題の重要度の根拠を見つけることができる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
d. 生じている問題について、知識や経験を通して説明できる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
e. 問題に影響を与える原因の候補をチームメンバーと一緒に検討して列挙し、まとめることができる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
f. 問題の原因を挙げ、重要度をまとめることができる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
g. 問題解決に向けて仮説を立てることができる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
h. 問題解決に合ったデータや情報を選択できる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
i. 集めたデータや情報の正確さがわかる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
j. 作成した図表について、必要に合わせた使い方ができる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
k. 分析した結果から、重要な結論を導き出すことができる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
l. 提案を適切にプレゼンテーションできる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
m. 提案した内容がどこまで有効かについて説明できる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
n. 自分の発表に対する質問に適切に回答できる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

この回答をトータルの平均重要度の大きさの順番に並べなおしたのが表 3.3 である。

重要度が上位に来ているのは、科学的分析に基づく問題解決の総合能力と解決に必要な基礎知識であり、当然の期待と考えられる。一方、それに続くのは、結論の伝達能力や導出能力となっている。

表 3.3 社会問題の合理的解決能力

探究行動	指定年度	Q6. 社会問題の合理的解決の能力					
		(1) 重要度			(2) SGH による効果		
		n	平均	標準偏差	n	平均	標準偏差
b. 関心ある事柄について、その問題の本質を発見したり、原因を説明することができる。	H26 年度	54	5.56	0.69	54	4.89	0.84
	H27 年度	54	5.48	0.61	54	4.96	0.87
	H28 年度	11	5.27	0.65	11	4.55	0.93
	計	119	5.50	0.65	119	4.89	0.86
a. 基礎学力としての知識を持つ。	H26 年度	54	5.50	0.80	54	4.80	0.92
	H27 年度	54	5.48	0.54	54	4.74	0.91
	H28 年度	11	5.36	0.67	11	4.45	0.82
	計	119	5.48	0.67	119	4.74	0.91
l. 提案を適切にプレゼンテーションできる。	H26 年度	54	5.46	0.69	54	5.22	0.77
	H27 年度	54	5.43	0.66	54	5.17	0.69
	H28 年度	11	5.18	0.75	11	5.18	0.60
	計	119	5.42	0.68	119	5.19	0.72

3. SGH プログラムによる生徒の変化への期待（重要度）と成果

k. 分析した結果から、重要な結論を導き出すことができる。	H26年度	54	5.39	0.76	54	4.80	0.81
	H27年度	54	5.41	0.69	54	4.69	0.72
	H28年度	11	5.18	0.98	11	4.64	0.81
	計	119	5.38	0.75	119	4.73	0.77
n. 自分の発表に対する質問に適切に回答できる。	H26年度	54	5.44	0.72	54	4.76	0.75
	H27年度	54	5.30	0.69	54	4.61	0.76
	H28年度	11	5.36	0.81	11	4.82	0.87
	計	119	5.37	0.71	119	4.70	0.77
c. 問題の重要度の根拠を見つけることができる。	H26年度	54	5.39	0.76	54	4.72	0.83
	H27年度	54	5.37	0.71	54	4.67	0.70
	H28年度	11	5.18	0.75	11	4.27	0.90
	計	119	5.36	0.73	119	4.66	0.79
e. 問題に影響を与える原因の候補をチームメンバーと一緒に検討して列挙し、まとめることができる。	H26年度	54	5.46	0.72	54	5.15	0.79
	H27年度	54	5.26	0.76	54	4.80	0.71
	H28年度	11	5.09	0.83	11	4.55	0.82
	計	119	5.34	0.75	119	4.93	0.78
h. 問題解決に合ったデータや情報を選択できる。	H26年度	54	5.39	0.79	54	4.89	0.79
	H27年度	54	5.30	0.66	54	4.54	0.84
	H28年度	11	5.27	0.79	11	4.55	0.69
	計	119	5.34	0.73	119	4.70	0.82
g. 問題解決に向けて仮説を立てることができる。	H26年度	53	5.43	0.80	54	4.98	0.81
	H27年度	54	5.22	0.79	54	4.59	0.92
	H28年度	11	5.18	0.75	11	4.36	0.81
	計	118	5.31	0.79	119	4.75	0.89
i. 集めたデータや情報の正確さがわかる。	H26年度	54	5.37	0.78	54	4.59	0.88
	H27年度	54	5.24	0.67	54	4.26	0.83
	H28年度	11	5.36	0.81	11	4.36	0.81
	計	119	5.31	0.73	119	4.42	0.86
d. 生じている問題について、知識や経験を通して説明できる。	H26年度	54	5.35	0.80	54	4.76	0.73
	H27年度	54	5.26	0.78	54	4.63	0.81
	H28年度	11	5.00	0.77	11	4.55	0.69
	計	119	5.28	0.79	119	4.68	0.76
f. 問題の原因を挙げ、重要度をまとめることができる。	H26年度	54	5.31	0.75	54	4.72	0.83
	H27年度	54	5.11	0.77	54	4.52	0.72
	H28年度	11	5.00	0.77	11	4.27	0.90
	計	119	5.19	0.76	119	4.59	0.80
j. 作成した図表について、必要に合わせた使い方ができる。	H26年度	54	5.19	0.75	54	4.67	0.78
	H27年度	54	5.09	0.73	54	4.57	0.79
	H28年度	11	4.91	0.94	11	4.27	0.79
	計	119	5.12	0.76	119	4.59	0.79
m. 提案した内容がどこまで有効かについて説明できる。	H26年度	54	5.13	0.78	54	4.52	0.77
	H27年度	54	5.13	0.75	54	4.44	0.63
	H28年度	11	5.00	1.00	11	4.27	1.01
	計	119	5.12	0.78	119	4.46	0.73

3.4 重要度と成果との関係

3.1 から 3.3 までのトータルの重要度の平均値を横軸に、成果の平均値を縦軸にとり、各項目をプロットした散布図が図 3.1 である。ただし、プロットに当たっては、3.1 のコンピテンシーの力量に c、3.2 のマインドセットに m、3.3 の問題解決能力に p を接頭辞として付けて、各項目のアルファベットで表示してある。重要度の平均と成果の平均との相関係数は、0.74 となり、 $成果 = 0.77 \times 重要度 + 0.72$ といった近似的関係が回帰分析より導かれるので、この回帰直線を散布図に重ね書きしている。

この回帰直線より上にある項目は、項目の中で SGH によって成果が生じていると思われる項目、下にある項目はもう少し伸ばす方法を考えなければならない項目と考えられる。その中でも成果が期待されている水準よりかなり大きい項目を大きさの順番に 6 項目挙げると、「様々な外国へ行ってみたい (ma)」、「外国の様々な異文化に触れることは楽しいと思う (mb)」、「提案を適切にプレゼンテーションできる (pl)」、「相手との協力関係を築くように心がける (cg)」、「海外ボランティアなどの国際的な活動に積極的に参加したい (mj)」、「自分と異なる立場の人の価値観を尊重する (cc)」となる。この中でも自分と異なる立場の人の価値観を尊重できる能力については、重要度評価も最重要となっており、これが平均以上に成果が上がっていることは現行 SGH プログラムの重要な意義と考えられる。

逆に期待される水準より成果が低い項目を低い方から 5 項目挙げると、「集めたデータや情報の正確さがわかる (pi)」、「自分に自信がある (mc)」、「自分の短所よりも長所に目を向けている (md)」、「提案した内容がどこまで有効かについて説明できる (pm)」、「基礎学力としての知識を持つ (pa)」、「問題の重要度の根拠を見つけることができる (pc)」となる。この中では、基礎学力としての知識は、比較的重要度の高い項目となっているが、回帰直線より下側に来ており、SGH プログラムで成果を上げるべきものは別として、改善方策を考えることが望まれる。

3. SGH プログラムによる生徒の変化への期待（重要度）と成果

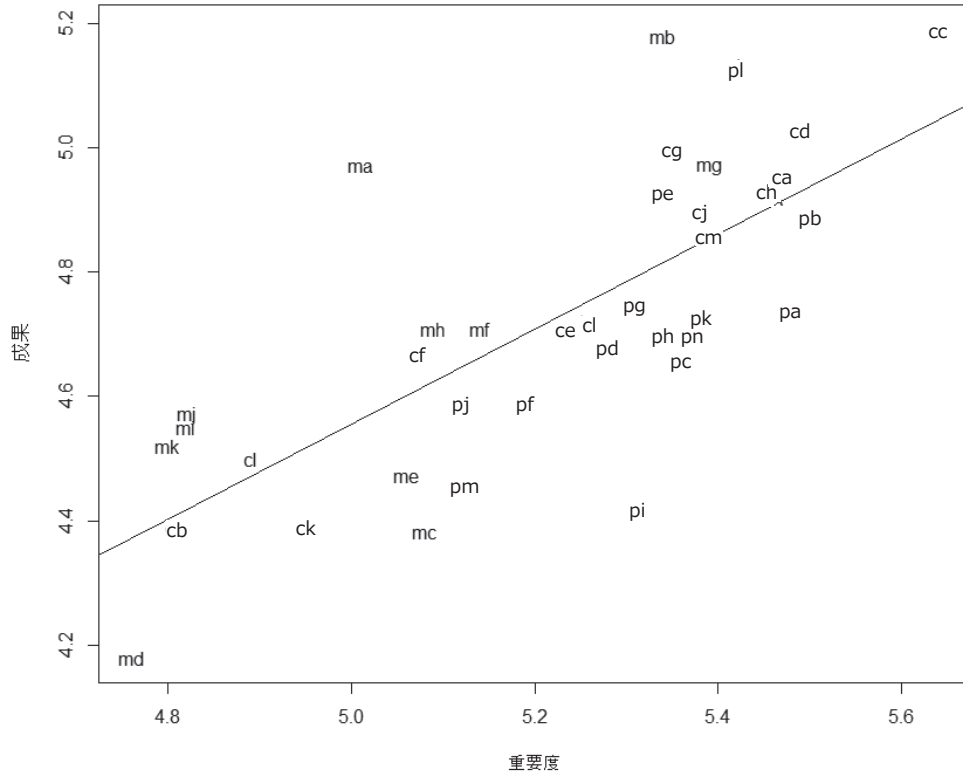


図 3.1 さまざまな能力に関する平均重要度と SGH プログラムによる平均成果との関係

4. SGH プログラム実施による SGH 指定校への影響

4. SGH プログラム実施による SGH 指定校への影響

4.1 SGH プログラム実施による生徒の進路の変化

SGH プログラム実施後、生徒の留学・国内学部進路実績の変化について、5点尺度による下記の分野についての増減に関する回答を求めた。

1：減少した

2：どちらかというと減少した

3：変わらない

4：どちらかという増加した

5：増加した

a. 海外大学への留学	1…2…3…4…5
b. 文学（外国語、外国文学を含む）・史学（世界史を含む）・ 哲学・心理関係学部	1…2…3…4…5
c. 海外文化・国際コミュニケーション等を含む人文学関係学部	1…2…3…4…5
d. 教育関係学部	1…2…3…4…5
e. 法学・政治学関係学部	1…2…3…4…5
f. 商学・経済学関係学部	1…2…3…4…5
g. 社会学・社会事業関係学部	1…2…3…4…5
h. 理工学関係学部	1…2…3…4…5
i. 農学関係	1…2…3…4…5
j. 医学・薬学・看護学など保健関係学部	1…2…3…4…5
k. 芸術関係学部	1…2…3…4…5

スコアの平均値が高い順に並べなおした結果を表 4.1 に示す。

表 4.1 進路実績の変化

進路実績	指定年度	Q8. 進路実績の変化		
		n	平均	標準偏差
c. 海外文化・国際コミュニケーション等を含む人文学関係学部	H26 年度	53	3.75	0.62
	H27 年度	53	3.72	0.66
	H28 年度	10	3.40	0.52
	計	116	3.71	0.63
a. 海外大学への留学	H26 年度	54	3.56	0.66
	H27 年度	54	3.67	0.73
	H28 年度	10	3.40	0.52
	計	118	3.59	0.68

g. 社会学・社会事業関係学部	H26 年度	53	3.28	0.53
	H27 年度	53	3.34	0.52
	H28 年度	10	3.30	0.48
	計	116	3.31	0.52
f. 商学・経済学関係学部	H26 年度	53	3.32	0.61
	H27 年度	53	3.25	0.52
	H28 年度	10	3.10	0.32
	計	116	3.27	0.55
j. 医学・薬学・看護学など保健関係学部	H26 年度	53	3.34	0.65
	H27 年度	53	3.21	0.45
	H28 年度	10	3.20	0.42
	計	116	3.27	0.55
e. 法学・政治学関係学部	H26 年度	53	3.23	0.54
	H27 年度	53	3.13	0.44
	H28 年度	10	3.10	0.32
	計	116	3.17	0.48
b. 文学（外国語、外国文学を含む）・史学（世界史を含む）・哲学・心理関係学部	H26 年度	53	3.04	0.48
	H27 年度	53	3.19	0.52
	H28 年度	10	3.20	0.42
	計	116	3.12	0.50
d. 教育関係学部	H26 年度	53	3.11	0.51
	H27 年度	53	3.13	0.44
	H28 年度	10	3.10	0.32
	計	116	3.12	0.46
h. 理工学関係学部	H26 年度	53	3.11	0.32
	H27 年度	53	3.13	0.44
	H28 年度	10	3.00	0.00
	計	116	3.11	0.37
i. 農学関係	H26 年度	53	3.08	0.38
	H27 年度	53	3.06	0.41
	H28 年度	10	3.20	0.42
	計	116	3.08	0.40
k. 芸術関係学部	H26 年度	53	2.96	0.34
	H27 年度	53	3.02	0.31
	H28 年度	10	3.00	0.00
	計	116	2.99	0.31

進路が変わらないというスコア平均3に対して、平均3.13以上の進路については、統計的に有意水準5%で当該進路が増大したことがわかる。人文学系学部、海外留学が特に顕著に増大するとともに、社会学・社会事業学分野、商学・経済学分野、医学・薬学分野・看護学が続き、法学・政治学分野も進路の増加が起きている可能性が指摘される。文学、教育関係学部、理工学、農学、芸術関係学部は有意な変化は認められない。

4.2 SGH 指定校になったことによる入学者の資質の変化

一方、SGH 指定校になったことで、入学者の資質に変化があったかについて、

- とても変化したと思う
- 変化したと思う
- どちらかと言えば変化したと思う
- どちらかと言えば変化していないと思う
- 変化していないと思う
- 全く変化していないと思う

かを調査した結果が、表 4.2.a である。どちらかと言えば変化がある、変化がある、とても変化したと思うとした学校が 86% となっている。また、平成 27 年度指定校は平成 26 年度指定校よりやや変化の傾向が大きくなっている（統計的には両側 10% 水準で有意）。

表 4.2.a SGH 指定校採択以降の入学者資質の変化

指定年度	構成	Q9.a. SGH 指定校採択以降の入学者の資質の変化						計	平均	標準偏差
		1:全く変化していないと思う	2:変化していないと思う	3:どちらかと言えば変化していないと思う	4:どちらかと言えば変化したと思う	5:変化したと思う	6:とても変化したと思う			
H26 年度	n	0	4	6	24	15	5	54	4.20	1.02
	構成比	0.0%	7.4%	11.1%	44.4%	27.8%	9.3%	100.0%		
H27 年度	n	0	3	2	17	27	5	54	4.54	0.93
	構成比	0.0%	5.6%	3.7%	31.5%	50.0%	9.3%	100.0%		
H28 年度	n	0	1	1	7	2	0	11	3.91	0.83
	構成比	0.0%	9.1%	9.1%	63.6%	18.2%	0.0%	100.0%		
計	n	0	8	9	48	44	10	119	4.33	0.98
	構成比	0.0%	6.7%	7.6%	40.3%	37.0%	8.4%	100.0%		

参考までに、指定校の入試倍率、募集定員の変化を表 4.2.b に示す。平成 26 年度指定校について、平成 28 年度に募集定員、倍率に若干の増大が観察される。

表 4.2.b 入試倍率・募集定員の推移

指標	指定年度	サンプル	Q9.c. 入試倍率、募集定員の推移						
			H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度	H28 年度	H29 年度	H30 年度
入試倍率	H26 年度	n	31	35	36	36	39	39	42
		平均	2.10	1.98	2.12	2.02	2.25	2.11	2.15
		標準偏差	2.01	1.87	2.08	2.02	2.53	2.36	2.31
	H27 年度	n	30	33	33	35	35	35	35
		平均	2.04	2.09	2.05	2.13	2.14	2.09	2.20
		標準偏差	1.53	1.40	1.43	1.64	1.68	1.66	1.87
	H28 年度	n	6	6	6	6	7	7	7
		平均	1.45	1.40	1.40	1.33	1.31	1.31	1.31
		標準偏差	0.54	0.73	0.69	0.64	0.67	0.70	0.64
	計	n	67	74	75	77	81	81	84
		平均	2.01	1.98	2.03	2.02	2.12	2.03	2.10
		標準偏差	1.71	1.60	1.73	1.77	2.08	1.97	2.04
募集定員	H26 年度	n	36	39	39	38	40	40	42
		平均	228.2	230.0	229.6	222.6	271.7	268.7	261.6
		標準偏差	131.2	128.1	130.3	130.3	311.9	297.4	289.3
	H27 年度	n	31	34	34	36	36	36	36
		平均	245.6	238.5	237.0	228.5	229.8	227.8	224.6
		標準偏差	115.5	120.3	120.8	119.2	122.4	123.2	121.6
	H28 年度	n	6	6	6	6	7	7	7
		平均	257.7	261.0	251.0	247.7	251.6	244.9	253.3
		標準偏差	104.2	114.6	107.9	110.6	109.9	112.6	95.3
	計	n	73	79	79	80	83	83	85
		平均	238.0	236.0	234.4	227.2	251.6	248.7	245.0
		標準偏差	121.6	122.6	123.4	122.6	231.1	222.2	218.1

5. SGH プログラムの有用性評価

次の項目に関して SGH プログラムの取り組みに関する有用性について 5 点尺度で回答を求めた。

1：有用ではなかった

2：あまり有用でなかった

3：どちらとも言えない

4：有用だった

5：大変有用だった

a. 生徒の国際的な知識及び技能の向上	1…2…3…4…5
b. 生徒の国際的な思考力・判断力・表現力等の向上	1…2…3…4…5
c. 生徒の学びに向かう力、人間力の向上	1…2…3…4…5
d. 国際的知識及び技能に関する教員の指導能力の向上	1…2…3…4…5
e. 思考力・表現力・判断力の育成に関する教員の指導能力の向上	1…2…3…4…5
f. 生徒の学びに向かう力の向上を支援する教員の能力の向上	1…2…3…4…5
g. 教員の指導モラル（士気）の向上	1…2…3…4…5
h. 学校全体の教育内容や教育時間配分の改善	1…2…3…4…5
i. 学校に必要な人的・物的体制の改善	1…2…3…4…5
j. 学習効果の最適性を図るカリキュラム・マネジメントの確立	1…2…3…4…5
k. 学校運営の仕組みの改善	1…2…3…4…5
l. 生徒の大学進学面への寄与	1…2…3…4…5
m. 貴校への進学希望への寄与	1…2…3…4…5
n. 貴校の社会的名声の増大	1…2…3…4…5
o. 以上を勘案した貴方の SGH プログラムに対する総合評価	1…2…3…4…5

まず、SGH プログラムに対する総合評価を表 5.1 に示す。総合評価の平均は 4.4 となり、有用と大変有用との間の高い水準となっている。

表 5.1 SGH プログラムに対する回答者の総合評価

有用性評価	指定年度	Q13. SGH プログラムの有用性		
		n	平均	標準偏差
o. 以上を勘案した貴方の SGH プログラムに対する総合評価	H26 年度	54	4.33	0.73
	H27 年度	54	4.44	0.54
	H28 年度	11	4.45	0.52
	計	119	4.39	0.63

具体的な項目についての有用性評価の高い順番を表 5.2 に示す。有用性に関する評価の平均スコアが 4 を超えて高い上位 3 項目は、生徒の向上に関する評価項目で、「学びに向かう力・人間力の向上」、

「国際的な知識及び技能」、「国際的な思考力・判断力」である。次いで教員の能力向上に関わる項目が4位から6位となっており、「思考力・表現力・判断力育成に関する指導能力」、「生徒の学びに向かう力の向上を支援する能力」、「国際的知識及び技能に関する指導能力」が続いている。

概していえば、教育内容・教育時間配分、必要な人的・物的体制の改善、カリキュラム・マネジメントなど学校全体のマネジメントに関わる項目についてはSGHプログラムの取り組みに関する有用性の評価が低い状況になっている。

表 5.2 SGH プログラムに対する有用性評価（評価の高い順にソート）

有用性評価	指定年度	Q13. SGH プログラムの有用性		
		n	平均	標準偏差
c. 生徒の学びに向かう力、 人間力の向上	H26年度	54	4.37	0.78
	H27年度	54	4.48	0.57
	H28年度	11	4.55	0.52
	計	119	4.44	0.67
a. 生徒の国際的な知識及び 技能の向上	H26年度	54	4.28	0.74
	H27年度	54	4.46	0.57
	H28年度	11	4.36	0.67
	計	119	4.37	0.66
b. 生徒の国際的な思考力・ 判断力・表現力等の向上	H26年度	54	4.31	0.75
	H27年度	54	4.44	0.63
	H28年度	11	4.27	0.47
	計	119	4.37	0.67
e. 思考力・表現力・ 判断力の育成に関する 教員の指導能力の向上	H26年度	54	4.15	0.79
	H27年度	54	4.28	0.56
	H28年度	11	4.18	0.60
	計	119	4.21	0.67
f. 生徒の学びに向かう力の 向上を支援する 教員の能力の向上	H26年度	54	4.07	0.75
	H27年度	54	4.20	0.63
	H28年度	11	4.18	0.60
	計	119	4.14	0.68
d. 国際的知識及び技能に 関する教員の 指導能力の向上	H26年度	54	4.04	0.78
	H27年度	54	4.17	0.64
	H28年度	11	4.09	0.70
	計	119	4.10	0.71
n. 貴校の社会的名声の増大	H26年度	54	3.91	0.87
	H27年度	54	4.02	0.76
	H28年度	11	3.55	0.82
	計	119	3.92	0.83
m. 貴校への進学希望への 寄与	H26年度	54	3.74	0.81
	H27年度	54	4.09	0.68
	H28年度	11	3.73	0.65
	計	119	3.90	0.75

5. SGH プログラムの有用性評価

g. 教員の指導モラル (士気) の向上	H26 年度	54	3.72	0.86
	H27 年度	54	4.02	0.66
	H28 年度	11	3.91	0.54
	計	119	3.87	0.75
j. 学習効果の最適性を図る カリキュラム・マネジメントの 確立	H26 年度	54	3.61	0.79
	H27 年度	54	3.93	0.67
	H28 年度	11	3.55	0.52
	計	119	3.75	0.73
k. 学校運営の仕組みの改善	H26 年度	54	3.54	0.82
	H27 年度	54	3.80	0.68
	H28 年度	11	3.91	0.54
	計	119	3.69	0.75
i. 学校に必要な人的・ 物的体制の改善	H26 年度	54	3.59	0.86
	H27 年度	54	3.69	0.89
	H28 年度	11	3.55	0.93
	計	119	3.63	0.87
l. 生徒の大学進学面への寄与	H26 年度	54	3.81	0.75
	H27 年度	54	3.94	0.83
	H28 年度	11	3.91	0.36
	計	119	3.88	0.76
h. 学校全体の教育内容や 教育時間配分の改善	H26 年度	54	3.50	0.84
	H27 年度	54	3.69	0.86
	H28 年度	11	3.91	0.83
	計	119	3.62	0.85

SGH プログラムへの全体評価がどのような項目の評価によって説明されるかを統計的機械学習（樹形モデルによる最適層別探索）で探った結果を表 5.3 に示す。「生徒の国際的な思考力・判断力・表現力等の向上」（Q.13b）について、「大変有用だった」という評価、更に、「思考力・表現力・判断力の育成に関する教員の指導能力の向上」（Q.13e）について「大変有用だった」という評価を得ることで、総合的な評価は、ほとんど「大変有用だった」となっている。

表 5.3 SGH に対する優れた総合評価の決定要因

	有用では なかった	あまり有用 でなかった	どちらとも 言えない	有用だった	大変有用 だった	計
Q.13b 有用以下	1 1.5%	0 0.0%	3 4.6%	49 75.4%	12 18.5%	65 100%
Q.13b 大変有用 Q.13e 有用以下	0 0%	0 0%	0 0%	13 48.1%	14 51.9%	27 100%
Q.13b 大変有用 Q.13e 大変有用	0 0%	0 0%	0 0%	1 3.7%	26 96.3%	27 100%
計	1 0.1%	0 0.0%	3 2.5%	63 52.9%	52 43.7%	119 100%

6. 現行 SGH プログラムの改善点

6.1 SGH 管理機関に対する満足度

現行 SGH プログラム実施への支援に関して、管理機関による支援満足度を次の6段階で尋ねた結果を表6.1に示す。どちらかと言えば満足以上が87%を占めている。また、平成27年度は26年度に比べて満足度が向上している。

表6.1 管理機関によるプログラム支援に対する満足度

指定年度	構成	Q11. 管理機関による SGH への支援の満足度						計	平均	標準偏差
		とても不満である	不満である	どちらかと言えば不満である	どちらかと言えば満足している	満足している	大変満足している			
H26年度	n 構成比	0 0.0%	1 1.9%	7 13.0%	15 27.8%	25 46.3%	6 11.1%	54 100.0%	4.52	0.93
H27年度	n 構成比	0 0.0%	1 1.9%	6 11.1%	12 22.2%	28 51.9%	7 13.0%	54 100.0%	4.63	0.92
H28年度	n 構成比	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	5 50.0%	4 40.0%	1 10.0%	10 100.0%	4.60	0.70
計	n 構成比	0 0.0%	2 1.7%	13 11.0%	32 27.1%	57 48.3%	14 11.9%	118 100.0%	4.58	0.90

6.2 改善の必要な点

SGH プログラムに今後必要な改善事項について、次のような4件法による質問を行っている。

後の SGH 活動で、次のような改善がどの程度必要と考えていますか？

- 1：必要ない
- 2：それほど必要とは言えない
- 3：必要であるが、学校単独での実現には限界がある
- 4：必要であり、学校独自で何らかの改善を実施したい

- | | |
|------------------------------|---------|
| a. プログラム実施予算の確保 | 1…2…3…4 |
| b. プログラム実施に関わる設備の充実 | 1…2…3…4 |
| c. プログラムを実施する教員・専門スタッフの増員 | 1…2…3…4 |
| d. プログラムを実施する教員・専門スタッフの能力育成 | 1…2…3…4 |
| e. プログラムを支援するスタッフの増員 | 1…2…3…4 |
| f. プログラム受講生徒の選抜基準の明確化 | 1…2…3…4 |
| g. プログラム成果の評価基準の明確化 | 1…2…3…4 |
| h. プログラムに利用する教材・教育方法に関する情報支援 | 1…2…3…4 |
| i. SGH 指定校間の情報交換の促進 | 1…2…3…4 |
| j. SGH プログラム修了生のネットワーク形成 | 1…2…3…4 |

6. 現行 SGH プログラムの改善点

改善の必要性が高いとされている項目を「必要ない」、「それほど必要とは言えない」という回答率が低い順に表 6.2 に示す。

表 6.2a プログラム実施予算の確保

指定年度	構成	Q10.a. プログラム実施予算の確保				計
		必要ない	それほど必要とは言えない	必要であるが、学校単独での実現には限界がある	必要であり、学校独自で何らかの改善を実施したい	
H26 年度	n	0	0	44	10	54
	構成比	0.0%	0.0%	81.5%	18.5%	100.0%
H27 年度	n	0	2	39	13	54
	構成比	0.0%	3.7%	72.2%	24.1%	100.0%
H28 年度	n	0	3	8	0	11
	構成比	0.0%	27.3%	72.7%	0.0%	100.0%
計	n	0	5	91	23	119
	構成比	0.0%	4.2%	76.5%	19.3%	100.0%

表 6.2b プログラムを実施する教員・専門スタッフの能力育成

指定年度	構成	Q10.d. プログラムを実施する教員・専門スタッフの能力育成				計
		必要ない	それほど必要とは言えない	必要であるが、学校単独での実現には限界がある	必要であり、学校独自で何らかの改善を実施したい	
H26 年度	n	0	2	32	20	54
	構成比	0.0%	3.7%	59.3%	37.0%	100.0%
H27 年度	n	0	3	19	32	54
	構成比	0.0%	5.6%	35.2%	59.3%	100.0%
H28 年度	n	0	0	5	6	11
	構成比	0.0%	0.0%	45.5%	54.5%	100.0%
計	n	0	5	56	58	119
	構成比	0.0%	4.2%	47.1%	48.7%	100.0%

表 6.2c プログラムを実施する教員・専門スタッフの増員

指定年度	構成	Q10.c. プログラムを実施する教員・専門スタッフの増員				計
		必要ない	それほど必要とは言えない	必要であるが、学校単独での実現には限界がある	必要であり、学校単独で何らかの改善を実施したい	
H26 年度	n	0	1	43	10	54
	構成比	0.0%	1.9%	79.6%	18.5%	100.0%
H27 年度	n	1	3	38	12	54
	構成比	1.9%	5.6%	70.4%	22.2%	100.0%
H28 年度	n	0	2	7	2	11
	構成比	0.0%	18.2%	63.6%	18.2%	100.0%
計	n	1	6	88	24	119
	構成比	0.8%	5.0%	73.9%	20.2%	100.0%

表 6.2d プログラムを支援するスタッフの増員

指定年度	構成	Q10.e. プログラムを支援するスタッフの増員				計
		必要ない	それほど必要とは言えない	必要であるが、学校単独での実現には限界がある	必要であり、学校単独で何らかの改善を実施したい	
H26 年度	n	0	3	43	8	54
	構成比	0.0%	5.6%	79.6%	14.8%	100.0%
H27 年度	n	2	5	37	10	54
	構成比	3.7%	9.3%	68.5%	18.5%	100.0%
H28 年度	n	0	1	8	2	11
	構成比	0.0%	9.1%	72.7%	18.2%	100.0%
計	n	2	9	88	20	119
	構成比	1.7%	7.6%	73.9%	16.8%	100.0%

必要性が高い上位2位は、表 6.2a、b に示したように同率トップで「予算の確保」と「教員・専門スタッフの能力育成」が挙げられた。第3位、4位も表 6.2c、d に示した「教員・専門スタッフの増員」及び「支援スタッフの増員」である。SGH 指定校は学校単独での能力育成は実現したいと考えている学校も半数程度あるが、「予算確保・増員」については「必要であるが、学校単独での実現には限界がある」と考えている学校が大半を占めている。

6. 現行 SGH プログラムの改善点

表 6.2e SGH 指定校間の情報交換の促進

指定年度	構成	Q10.i. SGH 指定校間の情報交換の促進				計
		必要ない	それほど必要とは言えない	必要であるが、学校単独での実現には限界がある	必要であり、学校独自で何らかの改善を実施したい	
H26 年度	n	1	5	34	14	54
	構成比	1.9%	9.3%	63.0%	25.9%	100.0%
H27 年度	n	1	6	27	20	54
	構成比	1.9%	11.1%	50.0%	37.0%	100.0%
H28 年度	n	1	0	6	4	11
	構成比	9.1%	0.0%	54.5%	36.4%	100.0%
計	n	3	11	67	38	119
	構成比	2.5%	9.2%	56.3%	31.9%	100.0%

表 6.2f プログラムに利用する教材・教育方法に関する情報支援

指定年度	構成	Q10.h. プログラムに利用する教材・教育方法に関する情報支援				計
		必要ない	それほど必要とは言えない	必要であるが、学校単独での実現には限界がある	必要であり、学校独自で何らかの改善を実施したい	
H26 年度	n	0	9	26	19	54
	構成比	0.0%	16.7%	48.1%	35.2%	100.0%
H27 年度	n	0	8	22	24	54
	構成比	0.0%	14.8%	40.7%	44.4%	100.0%
H28 年度	n	0	1	5	5	11
	構成比	0.0%	9.1%	45.5%	45.5%	100.0%
計	n	0	18	53	48	119
	構成比	0.0%	15.1%	44.5%	40.3%	100.0%

次に改善の必要があるのは、表 6.2e、f に示した「情報交換・情報支援の強化」である。これは、予算や増員に比べると学校単独の取り組みもある程度可能だが、一定の枠組み支援も必要と考えられる。

以下、表 6.2g、h、i に示すような項目が次に改善の必要が高いものとなる。ただし、「設備の充実」、「修了生のネットワーク化」は学校独自では困難度が高く感じられている。一方で「SGH プログラム評価基準の明確化」は学校独自でも取り組むべき課題と捉えられている。

表 6.2g プログラム実施に関わる設備の充実

指定年度	構成	Q10.b. プログラム実施に関わる設備の充実				計
		必要ない	それほど必要とは言えない	必要であるが、学校単独での実現には限界がある	必要であり、学校独自で何らかの改善を実施したい	
H26 年度	n 構成比	0 0.0%	4 7.4%	42 77.8%	8 14.8%	54 100.0%
H27 年度	n 構成比	1 1.9%	11 20.4%	32 59.3%	10 18.5%	54 100.0%
H28 年度	n 構成比	0 0.0%	3 27.3%	6 54.5%	2 18.2%	11 100.0%
計	n 構成比	1 0.8%	18 15.1%	80 67.2%	20 16.8%	119 100.0%

表 6.2h プログラム成果の評価基準の明確化

指定年度	構成	Q10.g. プログラム成果の評価基準の明確化				計
		必要ない	それほど必要とは言えない	必要であるが、学校単独での実現には限界がある	必要であり、学校独自で何らかの改善を実施したい	
H26 年度	n 構成比	1 1.9%	10 18.5%	12 22.2%	31 57.4%	54 100.0%
H27 年度	n 構成比	3 5.6%	9 16.7%	7 13.0%	35 64.8%	54 100.0%
H28 年度	n 構成比	0 0.0%	1 9.1%	3 27.3%	7 63.6%	11 100.0%
計	n 構成比	4 3.4%	20 16.8%	22 18.5%	73 61.3%	119 100.0%

表 6.2i SGH プログラム修了生のネットワーク形成

指定年度	構成	Q10.j. SGH プログラム修了生のネットワーク形成				計
		必要ない	それほど必要とは言えない	必要であるが、学校単独での実現には限界がある	必要であり、学校独自で何らかの改善を実施したい	
H26 年度	n 構成比	1 1.9%	13 24.1%	27 50.0%	13 24.1%	54 100.0%
H27 年度	n 構成比	3 5.6%	10 18.5%	22 40.7%	19 35.2%	54 100.0%
H28 年度	n 構成比	0 0.0%	4 36.4%	6 54.5%	1 9.1%	11 100.0%
計	n 構成比	4 3.4%	27 22.7%	55 46.2%	33 27.7%	119 100.0%

6. 現行 SGH プログラムの改善点

一方、表 6.2j に示すように SGH プログラム受講生徒の選抜基準の明確化については、「必要ない」、「それほど必要とは言えない」と答える学校が多数派を占めているが、平成 27 年度指定校では「独自の改善を実施したい」と答えた学校も 30% 以上存在している。

表 6.2j SGH プログラム受講生徒の選抜基準の明確化

指定年度	構成	Q10.f. プログラム受講生徒の選抜基準の明確化				計
		必要ない	それほど必要とは言えない	必要であるが、学校単独での実現には限界がある	必要であり、学校独自で何らかの改善を実施したい	
H26 年度	n	12	27	4	10	53
	構成比	22.6%	50.9%	7.5%	18.9%	100.0%
H27 年度	n	18	16	3	17	54
	構成比	33.3%	29.6%	5.6%	31.5%	100.0%
H28 年度	n	5	5	0	1	11
	構成比	45.5%	45.5%	0.0%	9.1%	100.0%
計	n	35	48	7	28	118
	構成比	29.7%	40.7%	5.9%	23.7%	100.0%

7. SGH プログラムの自走可能性

SGH プログラムとしての各種取り組みについて、今後自走による継続が可能かを下記の選択肢により回答を求めている。

- 完全に可能である
- 可能ではあるが、支援があることが望ましい
- どちらとも言えない
- 支援なくして不可能である

その結果を表 6.3 に示す。

表 6.3 SGH としての取り組みの自走継続可能性

指定年度	構成	Q12. SGH としての取り組みの自走による継続可能性				計
		支援なくして 不可能である	どちらとも 言えない	可能では あるが、 支援がある ことが望ましい	完全に 可能である	
H26 年度	n	11	10	33	0	54
	構成比	20.4%	18.5%	61.1%	0.0%	100.0%
H27 年度	n	10	11	32	1	54
	構成比	18.5%	20.4%	59.3%	1.9%	100.0%
H28 年度	n	2	3	6	0	11
	構成比	18.2%	27.3%	54.5%	0.0%	100.0%
計	n	23	24	71	1	119
	構成比	19.3%	20.2%	59.7%	0.8%	100.0%

「支援なくして（継続）不可能である」という学校は約 20%、完全に可能という学校は 1 校だけであり、約 60% が「(実施は) 可能ではあるが、支援があることが望ましい」という回答であった。

8. 小括

- ・アクションラーニングに関連した SGH 教育プログラムの開講頻度について、「日本語でのディスカッションないしはディベート」が平均月 1 回、さらに 1 学期に 1 回開講されるプログラムは、「課題研究レポートのまとめ方に関する授業」、「英語グループワーク」、「生徒自らによる調査データ収集・分析」等である。アクションラーニングが実践型の教育方法であることを勘案すると、今後の開講頻度のさらなる拡大が望まれる。
- ・採択年度間の教育方法を比較すると、平成 26 年度指定校は、「英語によるコミュニケーション」、「授業理解」、平成 27 年度採択校は、「課題研究やプレゼンテーション」であり、重視する領域の違いが見られる。後者は、前者の後発効果とみなすことも可能であるが、一方で、SGH プログラムが提供する教育プログラムの標準化の観点から、採択年による重点方法の違いは学校間の特色にもとづく最小限の範囲に留めるべきかもしれない。
- ・SGH と SSH の両プログラムに採択されている指定校の 85% は、双方のプログラム間の相乗効果を認識しており、グローバルとサイエンスを連携した教育プログラム開発の有用性が確認された。
- ・指定校が重要と考えるグローバルコンピテンシーの上位は、多様性受容やメタ認知にもとづく、他者理解、立場や意見の尊重である。これらは、コミュニケーションに属するコンピテンシーであるが、能動と受動の分類で分けると受動に属する。一方、2016 年度の高校生を対象とした SGH 国際比較調査では、日本の高校生は他国の高校生に比べて、能動的なコミュニケーション面で極めて低い傾向が見られ、今後の育成方針として受動型から能動型コミュニケーションへの転換が必要といえるであろう。
- ・グローバルマインドセットについても、指定校が重要と考える項目の中心は、「他者の意見を聞くこと」であり、次いで、「海外文化を楽しく思えるマインド」である。この点についても、上記 10 ヶ国比較調査において、日本は他国と比較して、自信をもつこと、対人関係性を構築することにおいて最下位にランクされている。このことから、コンピテンシー同様、マインドセットにおいても、学校側がより積極的な働きかけをするための自己確信の必要性を意識した教育が必要といえるであろう。
- ・指定校が高校生の資質や行動面、および心理面を総合して育成達成度が期待度を超える項目は、「海外に行ってみたい」、「異文化に触れる楽しさ」、「海外との協力関係構築」といった海外志向を上昇させるための項目が中心である。一方、「データの正確性の理解」、「自分に自信がある」、「短所よりも長所への着目」といった、上述の能動的な行動様式に繋がる項目については達成度が期待を下回っている。このことから、上記の教育方針の意識転換についての必要性が指摘される。
- ・SGH 受講後の進路について、進路の拡大、とりわけ人文系学部、海外留学が増大している。このこと自体は、視野の広がりを通して、選択の幅が拡大したことを意味している。今後は、量的な拡大（とりわけ海外留学）が期待される。
- ・SGH プログラムの有用性について、「学びに向かう力・人間性の向上」、「国際的な知識及び技能」、「国際的な思考力・判断力」といった生徒の意識面や知識・技能の向上といったソフト面に資する結果が示されている。一方、教育内容、教育時間配分、人的・物的体制の改善、カリキュラムマネ

ジメントといったハード面の学校全体のマネジメントが今後における課題として提示されている。

- ・SGHプログラムの全体評価として、「生徒の国際的な思考力・判断力・表現力等の向上」、および「思考力・表現力・判断力の育成に関する教員の指導能力の向上」の両項目が共に高い学校においては、総合的評価が格段に高い結果が示された。このことから、生徒の探求型学習に基づく結果のプレゼンテーション能力向上と、そのために必要な教員の指導能力がセットで必要である結果が示された。
- ・今後のプログラム運営に向けて果たすべきと考えている（必要であり、学校独自で何らかの改善を実施したい）上位3項目は、「プログラムを実施する教員・専門スタッフの能力育成」、「プログラム成果の評価基準の明確化」、「プログラムに利用する教材・教育方法に関する情報支援」であった。このことから、今後、指定校では、教育プログラムの質的拡充の必要性を考えていることが想定される。

SGH の事業検証に関する調査

筑波大学 SGH 研究班

本アンケート調査は、平成 30 年度文部科学省「スーパーグローバルハイスクール事業の成果検証」事業の一環として、SGH 指定校の校長・副校長・教頭等の方々を対象として実施させていただくものです。ご多用のところお手数をおかけしますが、何卒、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。なお、ご回答をもって、以下の実施要領にご同意いただけたものとさせていただきます。

- ・ ご回答には 30 分程度かかります。
- ・ ご回答されたくない質問項目については、ご回答いただく必要はありません。
- ・ 回答した選択肢により、質問番号の順番が変わることがあります。(例 Q1→Q3)
- ・ アンケートウェブサイトは SSL/TLS 暗号化コミュニケーションにより、ご回答いただいた貴校の情報は保護されます。
- ・ 回答内容は、実施責任者が複数パスワードを用いて厳重管理し、原則 10 年後に破棄されます。
- ・ 締切日(2018年6月22日)までに回答を完了してください。

実施責任者:筑波大学 SGH 研究班

アンケートの実施内容に関する質問は、下記までお問合せください。

SGH 研究班事務局

sgh.research@tsukuba-glp.org

本研究は、筑波大学附属学校教育局研究倫理委員会の承認を受けています。本研究に関する倫理面のご質問は、筑波大学附属学校教育局研究倫理委員会(東京キャンパス事務部企画推進課)までお問合せください。
東京キャンパス事務部企画推進課 Tel:03-3942-6422, E-mail:fk.kyoren@un.tsukuba.ac.jp

【あなたの学校の SGH プログラムについてお教えてください。】

Q1. 貴校の SGH プログラムで、導入されている教育方法とその活動頻度をお答えください。

- 1: 導入していない
 2: 在学中 1 回程度
 3: 1 年間に 1 回程度
 4: 1 学期に 1 回程度
 5: 月に 1 回程度
 6: 週に 1 回程度
 7: 週に 2 回以上

a. 英語による英語以外の授業	1…2…3…4…5…6…7
b. 外国人教員などによる授業	1…2…3…4…5…6…7
c. ロジカルシンキングの方法 (筋が通った考え方や説明の方法)に関する授業	1…2…3…4…5…6…7
d. 現実問題の解決のための研究方法 (データの取り方や分析の方法)に関する授業	1…2…3…4…5…6…7
e. プレゼンテーションの方法 (資料の作り方、発表の仕方、質問への答え方) に関する授業	1…2…3…4…5…6…7
f. 課題研究レポートのまとめ方(形式や構成)に関する授業	1…2…3…4…5…6…7
g. 海外研修	1…2…3…4…5…6…7
h. 海外生徒との交流経験(海外研修を除く)	1…2…3…4…5…6…7
i. フィールドワーク	1…2…3…4…5…6…7
j. 日本語での課題研究レポート作成	1…2…3…4…5…6…7
k. 英語での課題研究レポート作成	1…2…3…4…5…6…7
l. 生徒自らによる探究課題設定	1…2…3…4…5…6…7
m. 生徒自らによる調査データ収集・分析	1…2…3…4…5…6…7
n. 日本語でのグループワーク	1…2…3…4…5…6…7
o. 英語でのグループワーク	1…2…3…4…5…6…7
p. 日本語でのディスカッションないしはディベート	1…2…3…4…5…6…7
q. 英語でのディスカッションないしはディベート	1…2…3…4…5…6…7
r. 日本語でのプレゼンテーション	1…2…3…4…5…6…7
s. 英語でのプレゼンテーション	1…2…3…4…5…6…7

SQ1-1. その他、貴校独自の特徴のある教育方法があれば、その内容と頻度をお教えてください。(下欄にご記入ください。)

SQ1-2. SGH プログラムの設計にあたり、特に参考にした情報源、あるいは文献があればお教えてください。(下欄にご記入ください。)

SQ1-3. 貴校の SGH プログラムで、他校にみられないベストプラクティスとして他校への展開が可能とお考えのものがあればご紹介ください。(下欄にご記入ください。)

SQ1-4. 貴校の SGH プログラムで、今後改善した方が良いと思われる点があればお答えください。(下欄にご記入ください。)

Q2. (Q1. g.で海外研修を導入していると回答された方のみ、お聞きします。)

海外研修に参加した平均的な生徒を想定し、研修前後での変化についてお答えください。

a. 海外研修の経験によって、生徒のグローバル意識・能力は高まったと思われますか？

- とても高まったと思う
- 高まったと思う
- どちらかと言えば高まったと思う
- どちらかと言えば高まっていないと思う
- 高まっていないと思う
- 全く高まっていないと思う

b. 海外研修の前後で、生徒のグローバル意識・能力は具体的にどのように変化しましたか？(下欄にご記入ください。)

Q3. SSH(スーパーサイエンスハイスクール)と SGH との関わりについてお教えてください。

a. あなたの学校は、現在、SSH 指定校ですか？

- はい
- 以前は指定校だったが、現在は指定終了している
- いいえ(これまで SSH 指定校だったことはない)

b. (上記 a.で SSH 指定校である/あったと回答された方のみにお聞きします。)

SSH と SGH との間で、プログラム上の連携を図られていましたか？

- 強く連携させていた
- 連携させていた
- ある程度、連携させていた
- あまり連携させていなかった
- 全く連携させていなかった

c. (上記 a.で SSH 指定校である/あったと回答された方のみにお聞きします。)

SSH と SGH 両方の指定校であることにより、教育上または学校運営上における相乗効果があったと思われますか？

- 高い相乗効果があった
- 一定の相乗効果があった
- どちらとも言えない
- あまり相乗効果はなかった
- 全く相乗効果はなかった

d. (上記 a.で SSH 指定校である/あったと回答された方のみにお聞きします。)

SSH と SGH 間のプログラム連携の内容、相乗効果の内容について、具体的にお教えてください。

(下欄にご記入ください。)

--

【SGH プログラム導入により、貴校の生徒のどのような能力の成長が重要であり、SGHプログラムの実施を通して、平均的生徒に対してどの程度、獲得目標が達成されたかお聞かせください。】

Q4. 文化の違いから生じる、困った(困惑した)出来事(例えば、出会った外国人との言葉の壁、ジェスチャー・生活習慣・価値観の違い)に直面した際、

- (1) その解決のため、以下に挙げる行動をとれることは重要と考えていますか？
- (2) 貴校のSGHプログラム受講により、以前に比べて、生徒は、その行動ができるようになったと思われますか？

6段階(1:「全くそうは思わない」～6:「大変そう思う」)で、あてはまる番号を一つ選んでください。

- 1 全くそうは思わない
- 2 そうは思わない
- 3 どちらかと言えばそうは思わない
- 4 どちらかと言えばそう思う
- 5 そう思う
- 6 大変そう思う

	(1) 重要度						(2) SGHによる効果					
	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
a. 相手の置かれた立場や気持ちを察する。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
b. 必要ならば、最初に決めたことを変える。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
c. 自分と異なる立場の人の価値観を尊重する。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
d. 複数の視点から問題の原因を考える。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
e. 複数の選択肢を考える。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
f. 相手が意見を述べやすいように心がける。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
g. 相手との協力関係を築くように心がける。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
h. 反対意見にも耳を傾ける。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
i. 自分の得意な能力を活かす行動をとる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
j. 自分の意見を効果的に述べて相手に説明する。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
k. 解決が進んでいるか、途中で確認する。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
l. 今回の出来事から、学んだことを振り返る。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
m. 解決に向けて強い熱意を持ち続ける。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

Q5. (1) 貴校の生徒が将来、国際的に活躍するようになるために、以下に挙げるマインドセットを持つことは重要だと考えていますか？

(2) 貴校の SGH プログラム受講により、以前に比べて、生徒は、以下に挙げるマインドセットが向上したと思いますか？

6段階(1:「全くそうは思わない」～6:「大変そう思う」)で、あてはまる番号を一つ選んでください。

- 1 全くそうは思わない
- 2 そうは思わない
- 3 どちらかと言えばそうは思わない
- 4 どちらかと言えばそう思う
- 5 そう思う
- 6 大変そう思う

	(1) 重要度						(2) SGH による効果					
	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
a. 様々な外国へ行ってみたい。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
b. 外国の様々な異文化に触れることは楽しいと思う。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
c. 自分に自信がある。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
d. 自分の短所よりも長所に目を向けている。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
e. 自分は人のために役立つことができる人間だと思う。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
f. 集団での問題解決場面において、率先してリーダー的な役割を担うことができる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
g. 議論する際、自分だけが意見を述べることなく、参加者それぞれの意見を聞くことができる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
h. 自分のやりたいことを見つけ、それに情熱を傾けたい。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
i. 将来は、外国の大学や大学院への留学(6ヵ月以上)も視野に入れて勉強したい。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
j. 海外ボランティアなどの国際的な活動に積極的に参加したい。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
k. 将来、外国で働くことも視野に入れて、職業を選択したい。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

Q6. 社会で起きるさまざまな問題に対する解決方法を見つけるために、

(1) 以下に挙げる能力を持つことは重要だと思いますか？

(2) 貴校の SGH プログラム受講により、以前に比べて、生徒は、以下に挙げる能力が高まったと思いますか？

6段階(1:「全くそうは思わない」～6:「大変そう思う」)で、あてはまる番号を一つ選んでください。

- 1 全くそうは思わない
- 2 そうは思わない
- 3 どちらかと言えばそうは思わない
- 4 どちらかと言えばそう思う
- 5 そう思う
- 6 大変そう思う

	(1) 重要度						(2) SGH による効果					
	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
a. 基礎学力としての知識を持つ。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
b. 関心ある事柄について、その問題の本質を発見したり、原因を説明することができる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
c. 問題の重要度の根拠を見つけることができる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
d. 生じている問題について、知識や経験を通して説明できる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
e. 問題に影響を与える原因の候補をチームメンバーと一緒に検討して列挙し、まとめることができる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
f. 問題の原因を挙げ、重要度をまとめることができる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
g. 問題解決に向けて仮説を立てることができる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
h. 問題解決に合ったデータや情報を選択できる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
i. 集めたデータや情報の正確さがわかる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
j. 作成した図表について、必要に合わせた使い方ができる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
k. 分析した結果から、重要な結論を導き出すことができる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
l. 提案を適切にプレゼンテーションできる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
m. 提案した内容がどこまで有効かについて説明できる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
n. 自分の発表に対する質問に適切に回答できる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

Q7. その他、貴校の SGH のプログラム実施による生徒の学習面における態度や行動の変化にお気づきの点があれば、お教えてください。(下欄にご記入ください。)

Q8. 貴校の SGH プログラム実施後、生徒の留学、国内学部への進路実績の変化についてお教えてください。

- 1:減少した
- 2:どちらかというと減少した
- 3:変わらない
- 4:どちらかという増加した
- 5:増加した

a. 海外大学への留学	1…2…3…4…5
b. 文学(外国語、外国文学を含む)・史学(世界史を含む)・ 哲学・心理関係学部	1…2…3…4…5
c. 海外文化・国際コミュニケーション等を含む人文学関係学部	1…2…3…4…5
d. 教育関係学部	1…2…3…4…5
e. 法学・政治学関係学部	1…2…3…4…5
f. 商学・経済学関係学部	1…2…3…4…5
g. 社会学・社会事業関係学部	1…2…3…4…5
h. 理工学関係学部	1…2…3…4…5
i. 農学関係	1…2…3…4…5
j. 医学・薬学・看護学など保健関係学部	1…2…3…4…5
k. 芸術関係学部	1…2…3…4…5

SQ8-1. その他、SGHプログラムを受けた生徒の進路の変化についてお気づきの点があればお教えてください。(下欄にご記入ください。)

Q9. SGH 指定校になったことによる、貴校の入学試験への効用についてお教えてください。

a. SGH 指定校採択以降、貴校への入学者の資質について変化は見られますか？

- とても変化したと思う
- 変化したと思う
- どちらかと言えば変化したと思う
- どちらかと言えば変化していないと思う
- 変化していないと思う
- 全く変化していないと思う

b. SGH 指定校採択後の貴校への入学者の資質の変化について、お気づきの点を具体的にお教えてください。(下欄にご記入ください。)

c. 参考までに、貴校の過去 7 年間の入試倍率、及び募集定員の推移についてお答えください。(入試倍率は小数点第 1 位まで入力してください。)なお、中高一貫校で高校入試を実施されていない場合は、中学入試についてご回答ください。

- 平成24年度：(.)倍 ()名
- 平成25年度：(.)倍 ()名
- 平成26年度：(.)倍 ()名
- 平成27年度：(.)倍 ()名
- 平成28年度：(.)倍 ()名
- 平成29年度：(.)倍 ()名
- 平成30年度：(.)倍 ()名

Q10. 今後の SGH 活動で、次のような改善がどの程度必要と考えていますか？

- 1: 必要ない
 2: それほど必要とは言えない
 3: 必要であるが、学校単独での実現には限界がある
 4: 必要であり、学校独自で何らかの改善を実施したい

a. プログラム実施予算の確保	1…2…3…4
b. プログラム実施に関わる設備の充実	1…2…3…4
c. プログラムを実施する教員・専門スタッフの増員	1…2…3…4
d. プログラムを実施する教員・専門スタッフの能力育成	1…2…3…4
e. プログラムを支援するスタッフの増員	1…2…3…4
f. プログラム受講生徒の選抜基準の明確化	1…2…3…4
g. プログラム成果の評価基準の明確化	1…2…3…4
h. プログラムに利用する教材・教育方法に関する情報支援	1…2…3…4
i. SGH 指定校間の情報交換の促進	1…2…3…4
j. SGH プログラム修了生のネットワーク形成	1…2…3…4

SQ10-1. その他、今後の SGH プログラムに必要な方策などがあればお教えてください。(下欄にご記入ください。)

Q11. 貴校の管理機関による SGH プログラム実施への支援についてお教えてください。

a. 管理機関による SGH への支援について満足されていますか？

- 大変満足している
 満足している
 どちらかと言えば満足している
 どちらかと言えば不満である
 不満である
 とても不満である

b. 管理機関による SGH への支援について、役立っている点を具体的にお教えてください。(下欄にご記入ください。)

c. 管理機関による SGH への支援について、より強化が必要と思われる点を具体的にお教えてください。(下欄にご記入ください。)

Q12. SGH における貴校の取り組みの、学校単独での継続性についてお教えてください。

a. SGH プログラムとしての各種取り組みについて、今後、自走による継続は可能でしょうか？

- 完全に可能である
- 可能ではあるが、支援があることが望ましい
- どちらとも言えない
- 支援なくして不可能である

b. 自走での取り組み継続に向けて工夫されている点がありましたら、その内容をお教えてください。(下欄にご記入ください。)

Q13. 以下の項目に関して SGH プログラムの取り組みは有用でしたか？

- 1:有用ではなかった
- 2:あまり有用でなかった
- 3:どちらとも言えない
- 4:有用だった
- 5:大変有用だった

a. 生徒の国際的な知識及び技能の向上	1…2…3…4…5
b. 生徒の国際的な思考力・判断力・表現力等の向上	1…2…3…4…5
c. 生徒の学びに向かう力、人間力の向上	1…2…3…4…5
d. 国際的知識及び技能に関する教員の指導能力の向上	1…2…3…4…5
e. 思考力・表現力・判断力の育成に関する教員の指導能力の向上	1…2…3…4…5
f. 生徒の学びに向かう力の向上を支援する教員の能力の向上	1…2…3…4…5
g. 教員の指導モラル(士気)の向上	1…2…3…4…5
h. 学校全体の教育内容や教育時間配分の改善	1…2…3…4…5
i. 学校に必要な人的・物的体制の改善	1…2…3…4…5
j. 学習効果の最適性を図るカリキュラム・マネジメントの確立	1…2…3…4…5
k. 学校運営の仕組みの改善	1…2…3…4…5
l. 生徒の大学進学面への寄与	1…2…3…4…5
m. 貴校への進学希望への寄与	1…2…3…4…5
n. 貴校の社会的名声の増大	1…2…3…4…5
o. 以上を勘案した貴方の SGH プログラムに対する総合評価	1…2…3…4…5

SQ13-1. 今後の SGH プログラム実施による、さらなる有効性向上のための具体的なお提案がありましたらお聞かせください。(下欄にご記入ください。)

Q14. 自由記入欄

その他、これまでの SGH プログラムの運営を踏まえ、今後のプログラムに対する具体的なお意見やご希望があれば、以下の欄に記入してください。（下欄にご記入ください。）

質問は以上です。ご協力大変ありがとうございました。

※本調査結果の要約は、2019 年 5 月頃に、SGH のホームページに掲載予定です。ご閲覧は、”SGH”でウェブ検索してください。